

第24回 軽井沢22世紀風土フォーラム基本会議

【日時】 令和3年3月24日（水） 14:00～15:40

【場所】 軽井沢町役場 第3・第4会議室

【出席者】 基本会議委員：石山武委員、鈴木幹一委員、瀬川智子委員、
高尾幸男委員、中嶋聞多委員、藤井俊子委員、
飯塚真由美委員、高橋浩志委員、荻原貴士委員、
小林広幸委員、瀬原史織委員、森憲之委員、
柳澤陽平委員

内 容

1. 開 会

【導入】

ファシリテーター

緊急事態宣言が解除となったため、本日の会議に参加することができました。本日はアフターコロナにおける軽井沢の在り方、来年度の開催を予定しているシンポジウムについて議論していただく。忌憚のない意見をよろしくお願いいたします。

軽井沢町の人口推移を見ると、地方移住の流れで人口が増えていることが分かる。軽井沢においてはテレワーク拠点の整備が進められているところであるが、コロナ下にできることを進めていくことによって、他自治体よりも先んじた動きができると思われる。

2. 会長あいさつ

会 長

新型コロナワクチンの接種が始まり、東京五輪も開催に向けて少しずつ前に進んでいると感じる。

風土フォーラムはランドデザインの具現化が活動の原点である。未来志向で将来の展望や希望につながるよう、活発な議論をお願いしたい。

3. 議事

○プロジェクトチーム活動状況について（報告）

A委員（座長欠席のため）

2月4日に実施した大日向区長等との意見交換では、「若者世代のコミュニティ参加が少ない」「子どもたちへの大日向の歴史伝承」「浅間山噴火時の防災・減災」が課題であると聞いた。

第3回PT会議において、大日向地区の課題である「浅間山火山災害の防災・減災」を活動テーマに掲げ、住民主体のまちづくりの実現を目指す方向性が示された。また、「地域まち歩きを実施したい」という大日向区長の意向を踏まえ、意見交換を兼ねたまち歩きを実施することとなった。

3月15日に実施したまち歩きでは、大日向神社等の視察を行い、同行いただいた気象庁浅間山火山防災連絡事務所の方から浅間山災害等に関する話を聞かせていただいた。引き続き、地域と連携して活動を進めていきたい。

○エリアデザイン検討の進捗について（報告）

委託業者

エリアデザインの取り組みを進めている5エリアにおいて、各地域の実情等に応じて、懇談会やオンラインによる地域会議の開催、住民等へのアンケートを行いながら、今後の方向性について検討を進めている。

引き続き住民主体による議論を進め、具体的なアクションを起こしていければと思う。

○アフターコロナを見据えた軽井沢の在り方について

ファシリテーター

前回会議において、国内外の事例をもとに意見交換を行ったところ、5つの方向性について意見が出された。軽井沢における「守るべきもの」と

「新しい価値観・潮流」に関する知見を深めつつ、シンポジウムの内容について考えていければと思う。

シンポジウムでのアウトプットについては、風土自治の実践に向けた軽井沢の在り方と具体的な取り組みを考え、令和4年度以降のまちづくりに反映できればと思う。

本日は3名の委員からプレゼンテーションをしていただいた後、全体での討議を行いたい。

【多様性の可能性】

B委員

今後の軽井沢の在り方を考えるコンセプトとして、SDGsの理念でもある「多様性と包摂性」について伝えたい。多様性とは、年齢、性別、性的指向、国籍、立場の違い、障がいの有無、生き方等が否定されることなく互いに認め合えるということであり、社会変革の源泉でもある。また、包摂性は包み込むということであり、包含することで誰一人として取り残さないよう手を差し伸べ、仲間外れにするのではなく対等な立場で認め合うことである。

「多様性と包摂のまち」を軽井沢の基本コンセプトとして、パートナーシップによるまちづくりを進めていくことを提案したい。

【ツェルマットのまちづくり】

C委員

ツェルマットの基幹産業は農業と宿泊業である。一泊の宿泊料金は2～3万円と高めに設定されているが、観光客に提供する食事は地元で生産された食材のみを使う等のリピーターを獲得するための努力が徹底されている。また、村全体でホテルのベッド数を制限しているが、客単価の上昇により、利益も増加傾向にある。公共の立場にある「村」も利益を追求している。

ツェルマットでは、美しい空や美味しいミルクを守るため、CO₂を排出しない電気自動車や馬車が移動時に使われる。なお、電気自動車が故障した際には、村民が直すことができ、修理費等が地域内で循環する仕組

みが作られている。

社会、経済、環境はトレードオフの関係であると言われてきたが、今後は依存関係によって考えられていくのではないかと考えている。

【軽井沢のグローバル化】

D委員

軽井沢への移住者については、国際結婚や海外生活が長い人、二拠点居住等かなり多様性に富んでいると思う。10年ほど前に行われていた軽井沢の将来を考える議論の場で、よく耳にしたキーワードは「昔の軽井沢は良かった」である。しかし、最近はこの言葉を聞くことがなくなり、昔の軽井沢を知らない人の移住が増え、ブランドロイヤリティも変化していると感じている。

一昔前の観光であれば、旧軽井沢に行くことがステータスとなっていたが、現在は御代田や小諸などを含めた広域での「軽井沢」として見られている。

軽井沢を取り巻く環境の変化を理解したうえで、シンポジウムのターゲットについて検討し、未来志向の内容にしていくことが重要なのではないか。

【先端技術活用の事例】

ファシリテーター

日本政府は「グリーン」と「デジタル」による成長方針を掲げている。軽井沢の場合、「グリーン」に関しては大臣会合が開催された実績があるため、「デジタル」の部分を今後伸ばしていければ良いのではないか。
※自治体におけるテクノロジーの活用事例として、川崎市「水素地産地消モデル」、鎌倉市「ICTを活用したロードプライシング」、つくば市「RPA導入」などが紹介された。

【討議】

会長

軽井沢を訪れた人に滞在してもらうためには、広域的な視点で考える

ことが重要だと思う。

国際会議の誘致を進めていくことは、それを受け入れられるインフラ整備が必要になる。インフラ環境が整うことによって、交通問題や観光面でも良い方向に進むのではないか。そのためには、広域的連携や官民連携が必要になってくると思う。

E 委員

グランドデザインの 100 年構想を考えていくにあたっては、2030 年までの国連目標である SDGs や 2050 年「CO₂ 排出実質ゼロ宣言」を踏まえて、将来的なスケジュールを考えていくことが必要になるのではないか。それをシンポジウムで考えるのも良いと思う。

人間以外の生物（植物や動物等）を守っていくことが重要になると考えられ、今後の軽井沢の産業にもなり得る内容だと思う。ゼロカーボンと絡めて、「軽井沢らしい森づくり」について議論できれば良いのではないかと思う。

東日本大震災の復興事業として、軽井沢町が大槌町と関わってきたことを別荘所有者に周知した方が良い。また、大槌町から学んだ発災時の対応等もシンポジウムで紹介できれば良いのではないか。

C 委員

SDGs モデル都市として選定されるには、SDGs の目標に即した軽井沢の風土に合ったアウトプットを決めて内閣府に提出する必要がある。

軽井沢のフィトンチッドは特殊である。北海道の知人が浅間山を見て、良いところだと言っていた。

F 委員

皆さんからの意見が素晴らしいと感じる。

G 委員

軽井沢の魅力は、五感で感じられるものがあるところだと思う。また、動植物の生態系を保全することが重要なのではないか。昔はニホンリス

を町内でよく見かけたが、今は見ることすら難しい。

A委員

旧軽井沢エリアデザインの運営会議にて、「広葉樹を植えよう」と呼び掛けを進めていくこととなった。軽井沢の自然の特色は常緑樹が多いことだと思われるので、その点との兼ね合いも考えていかななくてはいけない。

○シンポジウムについて

ファシリテーター

今年秋頃の開催を予定しているシンポジウムについて議論していきたい。シンポジウムの基本スタンスとしては、これまでの風土フォーラムの活動で積み上げてきたものの報告や今後の軽井沢の在り方に関するディスカッションなどが想定される。予算の都合もあるが、専門家の方にもシンポジウムに参加していただくことも考えられる。

D委員

何を目的とし、誰をターゲットとして開催するのが重要である。風土フォーラムには第1期より携わってきたが、その間にも世の中の動きが変わってきている。未来志向で考えていくべき内容については、軽井沢らしさを踏まえ、カーボンフリー等に関する環境問題が良いのではないか。町長からも強いメッセージを発信していただくことで、移住者の心に刺さると思う。

グローバルを意識して、海外にオンラインで発信するくらいのメッセージ性があっても良いのではないか。これまでの風土フォーラムの集大成ということを意識する必要があるのではないか。

C委員

地域の課題という点においては、アーバンイノベーションジャパン神戸の取り組みが参考になる。DX（デジタルトランスフォーメーション）によって小さい課題を解決していくことをテーマとし、実証検証レベル

の事業を募っている。

宮城県富谷市のアーバンイノベーションジャパンは、よそ者を地域づくりに上手く充てている。

E 委員

PT で実施した大日向地区まち歩きでは、区民から「大日向神社は避難場所として使えるのではないか」という意見が出され、まさに風土自治であると感じた。また、浅間山のリスクや地域の歴史を区民に伝えていくために地域主体で必要な取り組みを考えようとする姿勢も感じた。オンラインを活用したまち歩き中継も実現可能であることが分かり、今後はデジタルを活用したコミュニケーション等も目指していけるのではないか。

UWC ISAK ジャパンと連携し、大日向神社を平和教育の観光スポットにするなど避難場所が楽しい場所となるように整備していければ良いのではないか。

H 委員

軽井沢流のシンポジウムとして、五感に訴えるような開催方法等を考えていくのも良いのではないか。通常の講演やパネルディスカッションだけでなく、色々な工夫があっても良いと思う。

これまでの風土フォーラムでは、「軽井沢モダン」という軽井沢らしい暮らし方等を深める議論がされていない。過去から未来に向かった文化変容も含めて考えていけると良い。

D 委員

未来志向を念頭に置きながら、芝生の上で開催する等の五感を刺激する仕組みを考えていく必要がある。

B 委員

軽井沢町は 2023 年に町制施行 100 周年を迎え、2027 年には新庁舎の建設が予定されている。新庁舎の基本方針では「緑の中の町役場・複合

施設」がコンセプトになっているので、環境や自然をテーマに掲げ、先々の予定と関連性を持たせた議論ができると良いのではないかと。

会 長(まとめ)

本日の議論で出された意見は、第6次長期振興計画の策定に向けた住民アンケートの回答でも多く寄せられていたと思う。今後、更に議論を深めていければと考えている。

町 長

C委員からスイスのまちづくりについて説明いただいた。私がスイスを訪れたとき、草が枯れてしまうような時季でも芝が青々としていた。その理由を現地の人に聞いてみると、牛糞を液化して散布していると言っていた。

C委員

スイスでは放牧が多く、排泄物を循環する仕組みがある。また、雑草も人の手で抜いている。

町 長

湯布院の地域内循環を意識したまちづくりは素晴らしい。観光協会は、農家に代金を支払って田んぼにはぜ掛けをしてもらい、観光客に田舎の雰囲気味わってもらうための景観づくりをしている。また、旅館等の家具は地元の家具屋の物が使われており、家具が古くなればカンナで削って色を塗るといった流れでモノを上手く循環させている。

軽井沢で考えれば、「軽井沢彫」を地域内で日常的に使われるものにしていかなくてはいけないと感じている。軽井沢は観光立町ではあるが、域内で循環させていこうという意識が働いていないように感じる。

エリアデザインの取り組みについては、「景観」「にぎわい」「経済」の3つの視点で作り込んでいくことが必要だと考えている。町の姉妹都市であるウイスラーにはこれらの要素が備わっている。どのような仕掛けで、地域にお金を落としてもらうのかを考えていくことが重要である。

シンポジウムは秋頃の開催ということであるが、内容等を早く決めていただき、開催に向けて準備を進めてほしい。

4. 事務連絡

○第6次長期振興計画策定に係るワークショップ実施概要について
企画調整係長

第6次長期振興計画の策定にあたり、ワークショップの開催を予定している。昨年の秋頃に実施した住民アンケートと併せてワークショップ開催の案内をしたところ、43名の方から参加申込があった。

このワークショップには、町職員を除く基本会議委員（3名）にも参加していただきたいと考えているので、よろしくお願ひしたい。

5. 閉 会